

■ はじめに

今年度の授業評価アンケートは、過去2年間に実施したものと対象授業およびアンケート項目を変更した。
[対象授業の変更]

従来は導入科目群および発展科目群（原則として第1 Semesterから第4 Semesterに履修する科目）を対象にアンケート調査を行ってきたが、来年度からの文学部改組にともない、国際言語文化学科は今年度の入学生を最後に募集停止となったため、今後役に立てるという目的では導入・発展科目のアンケートを行う意味がなくなった。そこで今年度は、第5 Semester以降に履修する専攻科目群・選択科目群に調査対象を切り替えてアンケートを実施することとなった。

[アンケート項目の変更]

従来は、対象授業を形態・性格によってグループ分けし、質問内容もグループごとに異なるものを使用してきた。しかし、専攻・選択科目群は内容・性格が多様でグループ分けになじまないため、全科目に同一のアンケートフォーマットを用いた。質問項目は本学のコア科目を対象としたアンケートに準じ、その一部を改めたものを使用した。

■ 目次

1. 実施概要
2. アンケート内容
3. 集計結果と分析

1 実施概要

- 1) 実施時期：2005年7月2日(金)から7月15日(木)
- 2) 調査対象：国際言語文化学科専攻科目群（ゼミを除く）および選択科目群（第5 Semester以降）の全科目
- 3) 対象授業数：65クラス（57科目）
- 4) 有効回答数：1,661
- 5) 科目名一覧

専攻科目群：Listening Skills (ADV)、Public Speaking、Presentation Skills、Reading Project、Academic Writing、Special Studies in English、Communicative German (ADV)、Special Studies in German A、Communicative French (ADV)、Special Studies in French A、Communicative Spanish (ADV)、Special Studies in Spanish A、Communicative Chinese (ADV)、Special Studies in Chinese A、イギリス文化研究、アメリカ文化研究、ドイツ文化研究、フランス文化研究、スペイン・中南米文化研究、英語圏文化研究、西洋思想史、欧米文化特殊研究A、イギリス文学研究、イギリス文学研究、アメリカ文学研究、フランス文学研究、スペイン・中南米文学研究、児童文学研究、欧米文学特殊研究A、中国文学研究、現代中国論、中国文化特殊研究A、日本文化研究、日本民俗学、日本文学特殊研究、観光人類学、観光地理学、観光マーケティング論、ホスピタリティ・マネジメント、国際観光論、観光マネジメント特殊研究、意味論、心理言語学、異文化間コミュニケーション論、児童英語教育、多文化教育論、外国語指導法I、外国語教育特殊研究、日本語音韻論、日本語文法論、日本語教育演習、日本語指導法I

選択科目群：通訳演習、翻訳演習、中国語能力試験、仏語能力試験、リサーチ・デザイン

- 6) 結果のフィードバック：
各授業担当者に、授業別評価集計結果とアンケート原本（自由記述欄あり）を返却
学生にはWEBを通じて公表

2 アンケート内容

1) 質問項目

[学生の取り組み]

1. 授業には意欲的に取り組んだ
2. 授業以外によく予習復習した

[教員の取り組み]

3. 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた
4. 毎回よく授業の準備がされていた
5. シラバスにそって授業が行なわれた
6. 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った
7. 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった
8. 授業中に学生の参加（質問・発言など）を促し、適切に対応した
9. 教員は良い学習環境を保つよう努力した
10. 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した
11. 教員は毎回熱意をもって授業をした

[授業の成果]

12. 授業全体についてよく理解できた
13. 授業の内容に興味をもてた
14. この授業に出席して有益な知識や情報を得られた

[総合評価]

15. 総合的に見て、この授業はいい授業だったと思う

[その他]

16. (各教員による自由設定)

[自由記述]

2) 回答方法

自由記述を除いた以上の質問項目に対し、「非常にそう思う」「ややそう思う」「どちらとも言えない」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の5つの選択肢から選択回答。

3 集計結果と分析

以下に、今回のアンケート結果の集計と分析を掲げる。

- 総合的な評価
- 学生の取り組み
- 教員の取り組み
- 授業の成果
- クラス規模

評価ポイントの見方

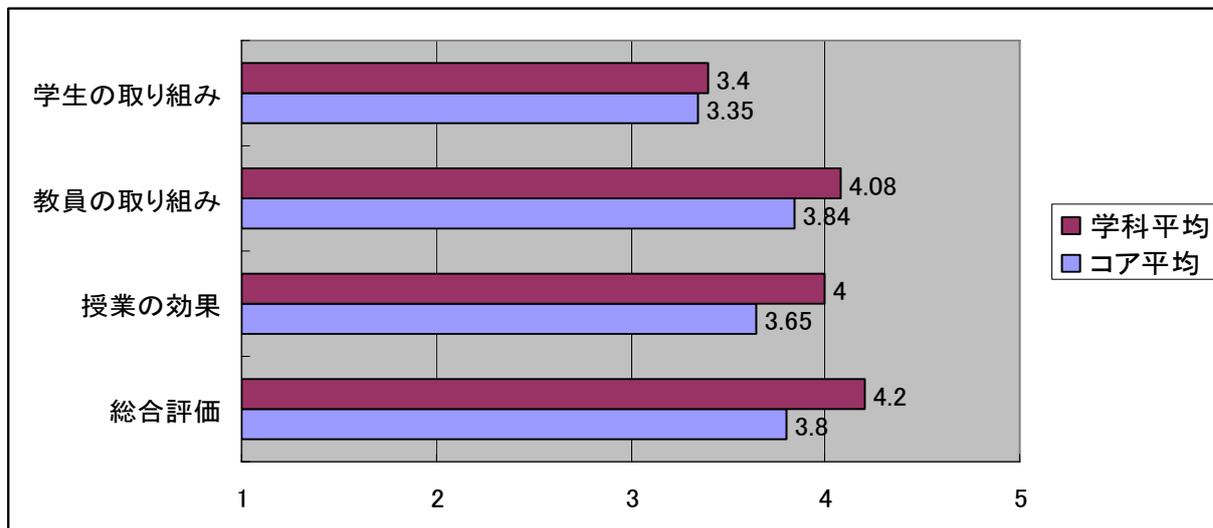
* 回答を以下のようにポイントに換算して数値化。

強くそう思う（5）、ややそう思う（4）、どちらとも言えない（3）、あまりそう思わない（2）
全くそう思わない（1）

* 肯定的な最高得点が5点、最低得点が1点、ニュートラルが3点となる。

■ 総合的評価

アンケートの質問項目を1) 学生の取り組み(設問1～2)、2) 教員の取り組み(設問3～11)、3) 授業の成果(設問12～14)、総合評価(設問15)の4分野に分け、それぞれの評価の平均値を求めると以下ようになる。なお、今回のアンケートの質問項目は、コア科目のアンケートをほぼ踏襲しているので、参考までに今年度のコア科目の平均値を共に掲げた。

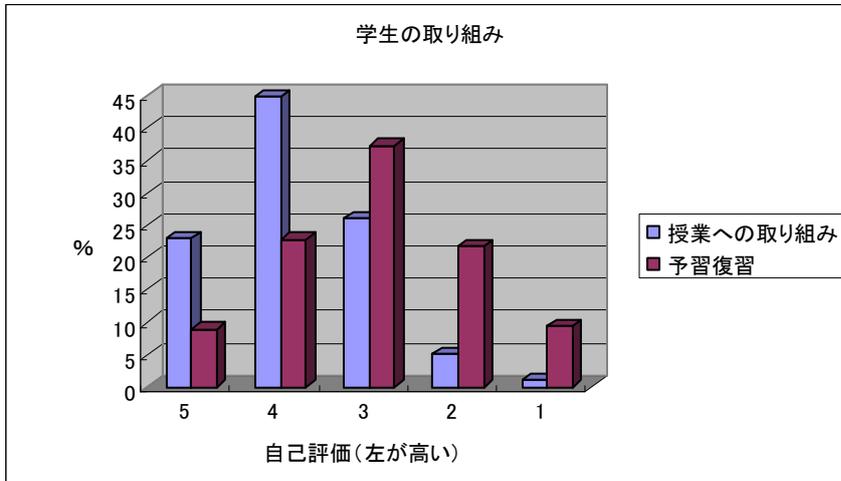


このグラフから見て取れるように、4分野のすべてにおいて、学科の平均値はコア科目を上回っている。学科のアンケートの対象科目が、基本的には自分の専門分野の科目が中心であることを考え合わせれば、コアの平均を上回っているからといって、それが直ちに満足すべき結果であったことを意味しているわけではないが、「教員の取り組み」、「授業の成果」「総合評価」の評点がすべて4を越える高い評価になっており、おおむね好評であったと言えるであろう。ただ、専門科目であるにもかかわらず「学生の取り組み」が十分に高い評価になっていない点は、逆に問題であるとも言える。

[補足] コア科目とは、全人教育の一環として幅広い、また学際的な社会的教養人(全人)となることを目指して、この全人形成にふさわしい教養が身につくことを目的とした科目。

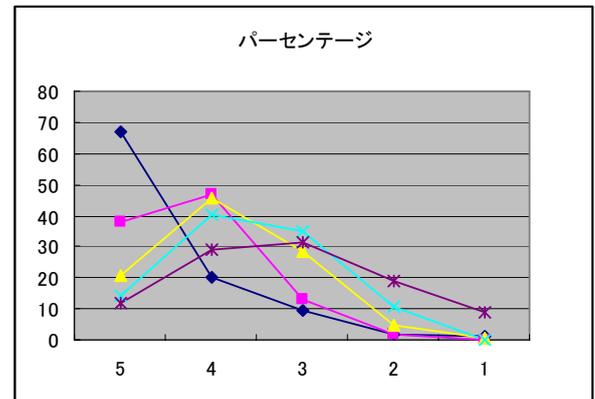
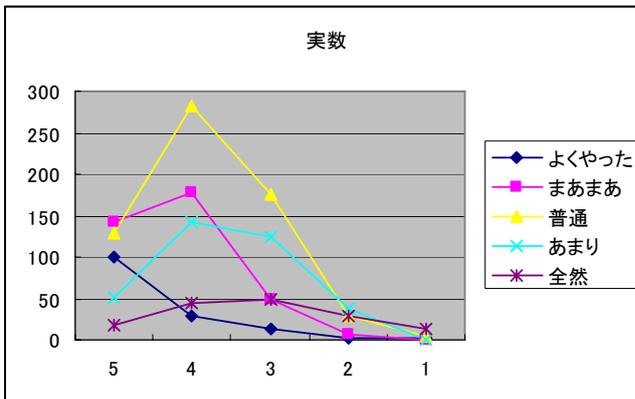
■ 学生の取り組み

授業への取り組み、および予復習についての自己評価は、低いポイントにとどまっている。以下のグラフは、両項目についての回答数のパーセンテージを示したものである。



ここに見られるように、特に「よく予復習をしたか」という質問においては、「どちらとも言えない」が37.3%で最も多く、「強くそう思う」「ややそう思う」という肯定的評価と、「あまりそう思わない」「全くそう思わない」という否定的評価が、それぞれ31.8%、30.9%とほぼ同数を占めている。特に「全くそう思わない」、つまりほとんど予復習をしなかったと答えた学生が9.3%もいることは、全体として教員の学生に対する要求があまり厳しくないことを示唆している。

下のグラフは、予復習を「よくやった」から「全然やらなかった」までの各グループの授業に対する理解度がどうであったかを見るため、設問2と設問12のクロス集計をとったものである。



各折れ線は、予復習の程度別に分けたグループの中で、理解度5（よく理解した）～1（全然理解できなかった）と答えたものがどのくらいいたかを表している。左のグラフは回答実数を、右は各グループ中でのパーセンテージをY軸にとっている。結果は予想されるとおりであるが、予復習を「よくやった」グループでは67%が「よく理解した」と回答し、「まあまあやった」グループで38%、「普通」で21%、以下「全然やらなかった」の11%まで、予復習時間と理解度は比例関係を示している。

この結果は、よく予復習をする学生の理解度が高いという以外に、予復習が必要な授業の理解度が高いということを示唆していると言えるのかもしれない。

■ 教員の取り組み

設問3から11の「教員の取り組み」に対する評価は、すべての項目で4ポイントを越えており、総じて高い評価を得たと言える。

各設問ごとの評価平均値は以下の通りである。

3. 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.2
4. 毎回よく授業の準備がされていた	4.3
5. シラバスにそって授業が行なわれた	4.0
6. 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	4.2
7. 教員の声や話し方は明瞭で聞き取りやすかった	4.3
8. 授業中に学生の参加（質問・発言など）を促し、適切に対応した	4.0
9. 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.1
10. 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.0
11. 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.4

中でも「毎回よく授業の準備がされていた」と「毎回熱意をもって授業をした」のポイントは高く、評点5と4を合計した肯定的評価が、どちらも85%を越える高率になっている。

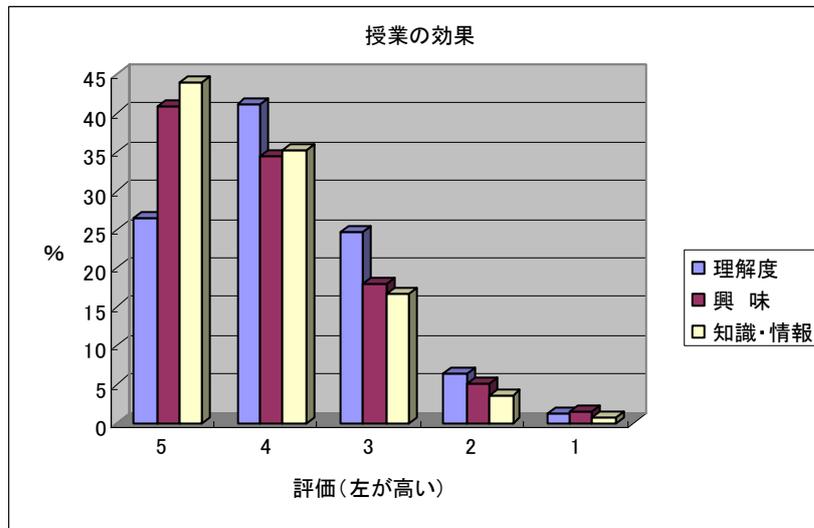
個別の授業ごとの評点にはばらつきはあるものの（特に「シラバスに沿っていたか」「学生の参加を促した」ではばらつきがあり、後者では人数の多いクラスでの評価が低くなっている）、肯定的評価5と4の合計が一番低い設問8でも68.5%であるから、全体としては概ね良好な結果であったといえる。

■ 授業の成果

設問 1 2 から 1 4 の「理解できたか」「授業の内容に興味をもてたか」「有益な知識や情報が得られたか」についての平均評点は以下のものであった。

12 授業全体についてよく理解できた	3.9
13 授業の内容に興味をもてた	4.1
14 この授業に出席して有益な知識や情報が得られた	4.2

各設問の回答数 (%) の分布は以下の通りである。



この中では「理解度」の評価が相対的に低くなっている。「よく理解した」と答えた学生の 26.5% という数字が多いか少ないかは一概に言えるものではないが、回答 5 と 4 を合計した肯定的評価が 67.5% あり、逆に回答 2 と 1、つまり「あまり、ないし、全然理解できなかった」と答えた学生はわずか 7.7% であるから、教員が求めるレベルであるかどうかは別として、学生の自己判定では大半の学生がそれなりに理解できたと答えたということになる。ただし、否定的評価は特定のいくつかの授業に集中しており、科目の性質やクラスサイズといった条件もあろうが、個別に対応が必要であろう。

「授業に興味をもてたか」「有益な知識・情報が得られたか」に関しては、肯定的評価が前者で 75%、後者では 80% に達している。

教員の側から見た評価とは、自ずと開きがあろうが、学生自身の評価では一応良好な結果であったというべきであろうか。

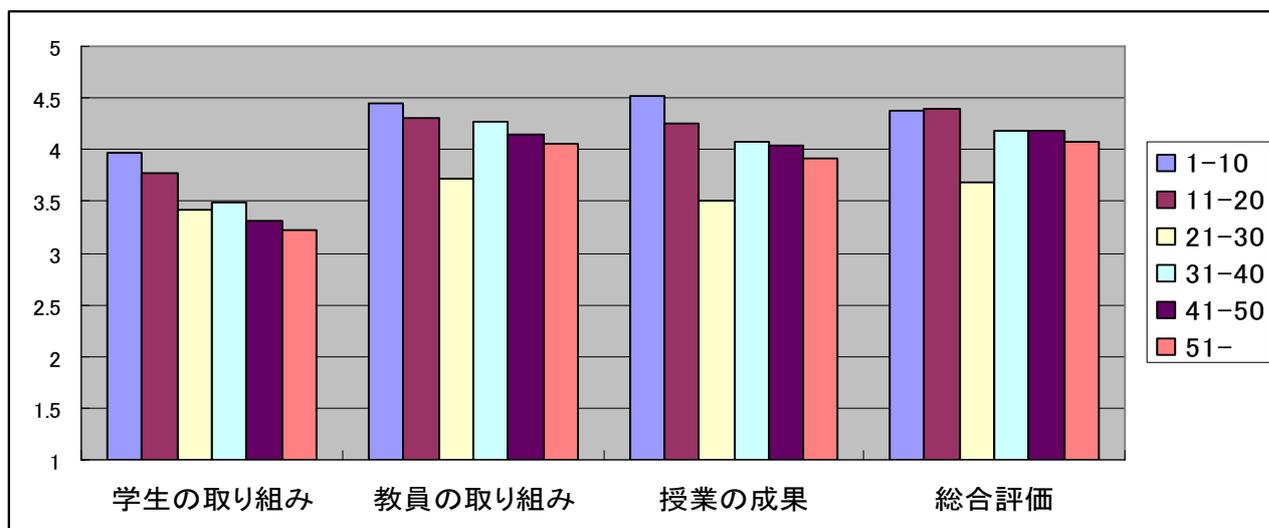
■ クラス規模

今回のアンケート結果から、クラス規模とアンケート結果の関係を探ってみた。春学期にアンケートを行った全65クラスを、クラス規模で分けてみると以下ようになる。

クラス規模	クラス数	延べ人数
10名以下	12	89
11～20名	25	327
21～30名	4	88
31～40名	5	155
41～50名	5	200
51名以上	14	802
総計	65	1,661

クラス数から見ると、20名以下のクラスが半数以上を占めているけれども、専門科目群でありながら50名を越えるクラスが14クラスもあり、その延べ受講人数は全体の半分近くの802名になるというのは、あまり好ましい状況であるとはいいがたい。

クラス人数別に、4分野の評価結果を見てみると、以下ようになる。



21～30名のクラスで評点が総じて低いのは、特定のクラスでの評価が反映したものであるが、それを除けば、クラス規模と各分野の評点は反比例していることが明らかである。

以上